

「パーソナル」を織り込む

10月中旬、あるユニークなファッションショーが東京都内で開かれた。デザイナーの中川正博さんによる、古着を「再生」した3品(もの)のコレクション「リサイクル」。パリコレで発表されるようなプレタポルテ(既製服)とも、着(けい)を凝らしたオートクチュール(高級洋装)とも違う、服と着る人と作り手の三者による新しい関係を模索する試みだ。



左: 赤い依頼さから
託されたドレス。
和布を使い、背中
が大膽に開いた下
ドレスが装飾された

発表されたのは、英国やオーストラリア、日本、韓国など世界8カ国18人の女性のために、中川さんが作ったもの。彼女たちの手持ちのドレスを、日本の着物はなど新しい素材を使って作り替えた服だ。ショーでは、一つ一つの作品に、依頼主の女性への中川さんからのメッセージが添えられていた。

「海の青が彼女のイメージ。そして活動的で健康的なライフスタイル」とてもエレガントでロマンチックな女性。娘さんに残すために作り替えたドレスは、ぜひ一瞬に着てほしい。「フェミニンなスタイルが好きで彼女、このドレスで情熱的な気分も味わって」……。

「単なる作り替えではなく、着る人の個性や、そのドレスに対する思い出や記憶といった時間までも形にしてみようと思ったのがきっかけでした」と中川さん。着る人の「パーソナリティ」が織り込まれていること、これが「リサイクル」の最大の特徴であり、普通のいわゆる「リメイク」とは違う点だ。

制作にあたり、それぞれの写真はもちろん、好きな色から生活スケジュールまで、94項目にわたる詳細なアンケートを一人ひとりに作成してもらい、さらにメールや電話でのやり取りを繰り返した。「着る人とのコミュニケーションを取ること。これがリサイクルでは何より大切だった」という。

STYLE

—文・國保 環



★単なる布きれではない

中川さんは、90年代半ば「20471120 (トゥー・オー・フォー・セブンワンワンツートー)」というブランドで、東京コレクションやパリコレに参加し、若者にカリスマ的な人気を博したデザイナーだ。だが、大量生産による安価な衣料品が市場を席巻するようになると、「新しさ」を追い求めるコレクションを中断。古着を解体して服にする「リサイクルプロジェクト」という活動を始めた。「1年前に買ったCDや本、服を覚えているかと言われたら思い出せない。消費のス

オーストラリア人の女性デザイナーに依頼され、彼女の亡き夫のTシャツを使って作ったドレス。左はそのデザイン画 (写真提供: Powerhouse Museum)

タイトなシルエットのドレス
②は、丈を短くし、ふんわり
優しく若々しいドレスに再生



ピードと人の生きるベースが合っていないことに疑問を感じたんです」

リサイクルは、そんな思いをさらに深化させたものだ。中川さんは「服の縦軸のエネルギ―の熟成」と表現する。新しいものをどんどん作り広めることを「横軸」とするなら、リサイクルは一人のひとと一着の服との関係を深めてゆくことになるからだ。

実は、今回のコレクションは、ある出会いがきっかけとなって生まれた。昨年9月から今年1月までオーストラリアのパワーハウスミュージアムで行われた、日本の現代ファッションの展覧会。そこでリサイクルプロジェクトの作品を見た、現地のデザイナーの女性から、「亡き夫が身につけていたTシャツを使って服を作してほしい」という依頼が舞い込んだ。彼女の自宅を訪れ、パートナーとの思い出を聞いた中川さんは、残された50枚のTシャツを、彼女の好きな花をかたどったドレスに仕立てた。「彼女と彼の人生を聞いて、デザインがわき上がってきた」という。

たとえばアルマーニでもユニクロでもドレスでもTシャツでも、ブランドや価格、種類に関係なく、どんな服にでも着ていた人の個性が染み付いている。数多くの古着に接して体得した「服は単なる布きれではない」という実感が、オーストラリアでの経験と結実し、「パーソナルな服作り」というデザイナーの役割を中川さんに気づかせた。

実験的に行われた今回の「リサイクル」コレクション。今後、その制作過程をシステム化して広めていきたいと中川さんは考えている。「新しい服に袖を通すときのドキドキ感。それは否定できない。だから、単に『もったいない』という思いからの作り替えではダメ。デザイナーの視点が加わることで、服がそれまで過ごしてきた時とともに再び生き返る……。そんな一枚一枚を作りたい」という。

リサイクルチュール

デザイナー 中川正博さんの古着再生

